

吉原幸子小論 最終章

母にどうして

鯉淵史子

私はかつて、少女の日に、「母になることは死ぬことだ」と心に決めた。それは私が母その人に求めた愛だったからだ。どこかで、子のためになら母親は命を投げだす、という母性愛について耳にしたせいもあつただろう、私のためになら母は死んでくれるのか？とその愛を確かめることもできないかわりに、私が死んだら母は泣くか？と死を想うことで甘い感傷にひたつた。それは次第に、母その人へのあてつけにも似た思いから、私が母親になつたら子どもにこんな思いはさせはしないという思いにいたり、母親になる日にむけて私は、私を死にきろうと決めたのだった。お母さんになること、その日までに、私は私を死にきつてみせるということ、その死が、少女の日に私がめざしたひとつの夢だった。けれど私はいまもこの私を死にきることができずにいる。

吉原幸子の詩をよみ、こうした少女の日の決意というものをよく思ひだした。それは吉原にこうした少女の日の決意というものが、たえず忘れられないものとして刻まれ続けていたからではないかと私は思う。実人生においては結婚をし出産をして一人の母親ともなつた彼女ではあるが、かつて彼女が、少女の日にめざしたその死、私を死にきつて母になつてみせるというその決意が、果たしきれないまま彼女にのこりつづけていたのではないかと思うのだ。とくに彼女の第一詩集『幼年連袴』には、まるで少女の日の決意をそこに果たしきろうとするかのようになつて、かつての私を死にきろうとするかのような思い、そこに鎮めようとするかのような思いも込められていると感じる。

わたしは耐へよう おまへの痛さを うむため
おまへも耐へておくれ わたしの痛さに 免じて
「あたらしいのちに」

それでも ききとらうとつとめてしまふ耳に
ただひとつ
解読できる暗号があつた

あんな あたしの母さん？ 「病院にて(二)」

吉原幸子のこの二つの言葉がどうしても気がかりだった。それがどうしてなのか、ようやく分かつてきた。私にとりどちらの言葉も、私が母からどこかで暗に受けとつてきたコトバだと感じているからだ。それを、子、という立場で聞き取つてしまつたとき、この言葉はまるで幼い日に母が死ぬ夢をみてしまったときのその寝覚めの悪さにも似て、「あなたがしんじてるお母さんはどこにもイナイ…」というささやきにも聞こえる。

かつて少女の日に、私がだれよりも死んで欲しかつたのは、こうしたコトバをささやく母の私というその気配だった。私がのぞんでいたのは、母その人の死では絶対になく、お母さんが、お母さん、だけになつてくれること。母の私、が死ぬ、そのことだった。子のためになら命までも投げだすのが母親の愛なら、私は命までとは言わないから、母にその私を死んで欲しいと思ひ、それは母にとつても子である私が死ぬことよりはマシなはずだ。とそう思ひたかつたのだ。

そうした私にとり、「あんな あたしの母さん？」という一言は、母がいつの日か口にしてしまつたのではないかとおそれ、母にかたく禁じてきたそのコトバであり、また、私がこの言葉に「ユルセナイ！」という感情が走つてしまつたのは、「お母さんはお母さんでいてくれなきゃイヤだ」とねだる子どもめいた幼い心がいまだに私の根深いところに残っているからだ。そして、母を求めてしまつたその根深い心こそ、いまも私が死にきれずにいる。私であり、かつて母その人に死んで欲しかつた私、なのだと思ふ。

そしてまた、この二つの言葉はいつの日か私自身が口にしてしまひそうなコトバでもある。少女の日の決意が果たしきれず、私が私を死にきれずに母になつたとき、私はかならず自分自身へのやましきにも似た、痛みを感じ

るだろうし、母の愛を求めてしまつた子どもめいた幼い心が私にのこつているかぎり、私こそいつの日か「…あたしの母さん？」と、口にしてしまつたのではないかとおそれているのだ。

吉原幸子にとりこの二つの言葉は、先のは母として子に向けたコトバ、後のは子として母から聴きとつてしまつたコトバではある。出産を主題とした詩から、母の老いと死をみとることを主題とした詩、と、彼女の実人生で言えば30代から50代へと、そこに20年程のおおきなひらきがある。けれどこの二つの言葉のなかには、母、というものをめぐる彼女のひとつの心、少女の日のその決意というものが通底しているのではないかと感じている。

私の母も、吉原幸子も、私を死にきれなかつた母親だ。しかしさらに言つと、彼女らの方こそ、私なんかよりずっと先に、「母になることは死ぬことだ」と心に決めていた少女、ではなかつたかと思ふ。

そしてその上で、実人生において母親となり、少女の日の果たしきれないその決意をかかえこんだままその葛藤を生きぬいたのが彼女らだ。だからこそ母になつたとき、だれよりも真つ先にその少女から「ユルセナイ！」という鋭いコトバをつめたい刃先のように突きつけられてもいたのだらう。少女の日に夢見たその母になりきれないのもっとも感じているのは、彼女ら自身だつたはずだ。そして、私を死にきれずに母となつたそのことを、少女の日の決意をみずから裏切つたかのようにだれよりも許しきれず、少女の日の決意から続くその未解決な痛みとして、「わたしの痛さ」を感じつづけてもいるのだと思ふ。

吉原にとり、「あんな あたしの母さん？」と、母その人からききとつてしまつたそのコトバとは、かつて少女の日の彼女がもっともユルサナカッタはずのコトバだと想ふ。日常の余白のようなところで母が生きつづけていたその私を、はじめてまのあたりにしてしまつたその瞬間がそこにはあり、ずつと気配にすぎなかつた母の私、がやつぱり死んでいなくなつた、ということをとあしからめてしまつたその瞬間がこの言葉にはある。

そして彼女にとりそれは、少女の日のその決意からつづ